

編纂所だより

大阪市史編纂所（発行）

平成20年10月発行

第31号

大阪市史料調査会（編集）

〒550-0014 大阪市西区北堀江4-3-2

大阪市立中央図書館内

06-6539-3333

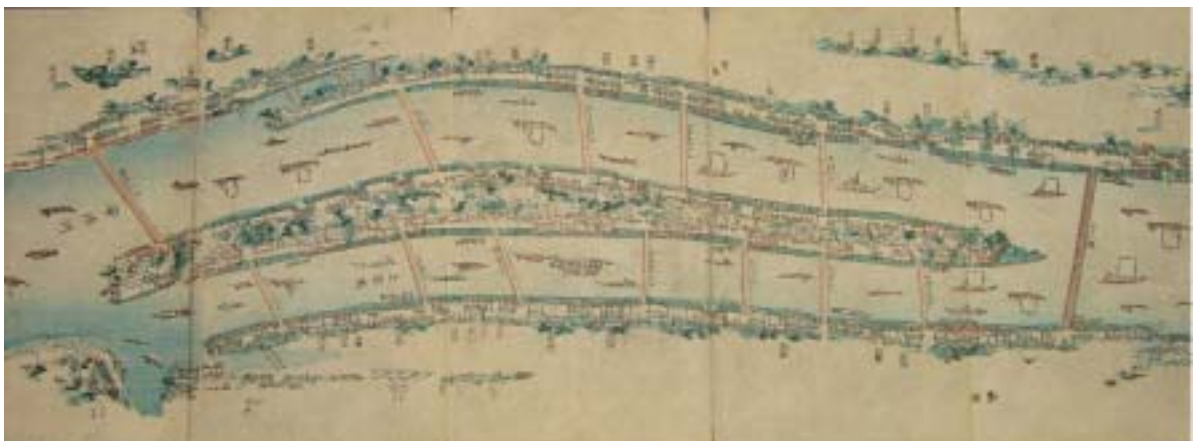
江戸時代の大阪の水運

中之島周辺を流れる川を眺めていると、水面を走る水上バスの姿を見かけます。今年に入って八軒屋浜が整備され、水陸両用バスの開通が話題を呼んでいます。これは大阪が古くから「水の都」と呼ばれていたことを多分に意識した動きなのでしょう。

天保期に出版された『大川便覧』に描かれた中之島を眺めてみると、今とは比べものにならないほど多くの船が行き交っています。中之島周辺に限らず、江戸時代の大阪市中には縦横に水路が張り巡らされ、上荷船・茶船と呼ばれる川船が活躍していました。これらは大きさで区別されており、上荷船は、長さ30尺8寸（約9.3m）、最大幅7尺（約2.12m）、20石積で水主2人が乗り組み、茶船は長さ26尺5寸（約7.95m）、最大幅5尺6寸（約1.7m）、10石積で水主1人が乗り組んでいました。文禄年間（1592～96）には存在が確認でき、元和5年（1619）に上荷船約1,600艘、茶船約1,000艘が大坂町奉行支配となっています。

上荷船・茶船は大阪市中の貨物の運搬を独占しており、大坂の川口のほか兵庫・尼崎・神戸・岸和田沖合に着いた廻船の船荷は上荷船・茶船に移され、逆に廻船問屋が請け負った荷物を運び出す際には、大阪市中から海上まで運んでいました。また近郊には過書船・伏見船・剣先船・柏原船などの川船が運航していましたが、天満橋あるいは京橋を境として大阪市中に入ることを許されませんでした。上荷船・茶船に与えられた権利をめぐって、しばしば争論が起きましたが、常に上荷船・茶船側の訴えが認められていました。上荷船・茶船に与えられた特権の大きさがうかがえます。

さて大阪市中を航行する川船がスムーズに運航するためには、河川の維持管理が必要不可欠です。淀川が運んでくる大量の土砂が河口部にたまると水の流れが滞り、洪



中之島周辺の様子（『乗陸必携 大川便覧』大阪市立中央図書館蔵）

水の原因や船の運航の妨げとなりました。そこで河川に堆積する土砂を取り除くべく川浚がわざらえが定期的におこなわれました。川浚には、天満から中之島周辺を対象とし最初に制度化された大川浚きつ、木津川や安治川などの川口浚あじ、市中の堀川を対象とした内川浚の3種類がありました。

川浚を差配したのは大坂町奉行所の川役（川奉行）です。川役は摂津および河内の川筋あしの管理を担当し、川浚の差配をおこないました。また川筋の村々に、川沿いの葭の定期的な刈り捨てを徹底させ、堤上の不必要な竹木植え付けおよび家作の禁止など、堤防を保全し、川の流れが滞らないよう指導しました。

江戸時代、大坂市中を流れる河川と行き交う川船は、自然現象や幕府の政策、新たな交通機関の参入といった変化にさらされ続けました。江戸時代大坂で「水の都」が存続して来られたのは、大坂に暮らす人びとがその利便性を自覚し、それぞれの立場で維持管理に尽力してきたからといえるでしょう。（松本 望）

中之島の御大尽 上田三郎左衛門

江戸時代は米が経済の中心でした。西日本を中心とする大名は年貢米を換金するため大坂に蔵屋敷を置きました。蔵屋敷は大川沿岸、とりわけ中之島にたくさん建ち並びました。大川周辺に集められた米を販売するために堂島には米市ができました。

北浜・中之島といった大川周辺には、中之島の開発や淀屋橋かせつの架設で有名な淀屋辰五郎などたくさんの豪商が住んでいました。その中でも今回はあまり知られていない上田三郎左衛門の話をしていきましょう。

天明8（1788）年の長者番付ちやうじゃばんづけには鴻池善右衛門こうのいけや三井八郎右衛門らをおさえて、平野屋五兵衛と上田三郎左衛門が大関に名を連ねています（この頃横綱の位はなく、番付では大関が最高位でした）。平野屋五兵衛は今橋一丁目に店舗をかまえた大坂を代表する両替商です。

その約半世紀前、西日本一帯にイナゴが大量発生し稲に大きな被害が出ました。江戸の三大飢饉ききんのひとつ享保の飢饉です。この時、全国から義援金（米も含む）が集まりました。大坂も多くの人々が米や銭を出しました。なかでも上中之島町の大和屋（上田）三郎左衛門・長堀茂左衛門町の泉屋（住友）吉左衛門・吉野屋町の辰己屋久右衛門かんもん（炭屋業）・平野屋五兵衛は群をぬいていました。上田は米13石余・銭1万691貫文余を出しています。金貨に換算して2000両を超えます（金1両を仮に10万円とすると2億円以上の額です）。次点の泉屋は250両。奈良や堺や伏見などは一都市全体でも上田の額にははるかにおよびません。上田のスケールの大きさがうかがえます。

上田の居宅きょたくは現在の府立中之島図書館の西にありました。間口23間（約44m）という敷地は大名の蔵屋敷にも匹敵する広さです。実際に敷地内にある蔵ぶんごのくにを豊後国（大分県）の岡藩が借用していたこともあったようです。この邸宅は「御預地」といって、幕府から提供を受けた土地でした。

上田はもともと北国廻りの廻船問屋まわかいせんでした。享保の飢饉で名をうり、やがて幕府の御蔵米くらまいを輸送する廻船問屋となり、まもなく大坂城の御蔵米をあつかう「御蔵米払方入札銀掛屋にゆうざつぎん かけや」に指名されます。こうして大坂城の米が、中之島にある上田の邸宅で入札販売されるようになります。売却代銀かわせは為替に組んで江戸に送ります。このため江戸の駿河町にも店をもつようになります。そして三井組とならんで幕府の公金をあつかう「金銀為替御用達ごようたし」となったのです。

江戸時代の大坂商人はもっぱら西国大名との関係を大事にして、幕府の御用を勤めようという気持ちはありませんでした。ところが上田三郎左衛門は幕府とのつながりを深めることで成長した商人だったのです。淀屋や鴻池屋などと比べて、大阪での知名度が低いのはこのあたりにあるのでしょうか。

ちなみに、上田三郎右衛門は、物見山伝蔵・獅々飛岸右衛門・雷鶴之助・戸根川郷右衛門・根津ケ関岡右衛門といった力士のパトロンでもありました。堂島・中之島は力士の供給地で、相撲とゆかりのある場所なのですが、これは別の機会にお話しすることにしましょう。
(野高宏之)

『大阪の歴史』第71号 & 『大阪市史史料』第71輯 発売中！

大阪の歴史 第71号 (1冊700円+送料210円)

【特集：堂島・中之島とその周辺】

橋爪節也「描かれた堂島 - 画家は都市に何を読み取るか - 」

堀田暁生「中之島の自由亭ホテルと草野丈吉について」

【堂島と中之島そのミニ知識】編集部

【論文】

野高宏之「大坂町奉行組与力における吏と武の意識」

川崎讓司「大坂城定番与力・同心の支配形態」

堀田 藍「明治・大正期の大阪落語戦争」

その他



大阪市史史料 第71輯「大坂城再築関係史料」

(1冊1,800円+送料290円)

～表紙リニューアル！～

大坂の陣で灰燼に帰した大坂城は、元和6年(1620)～寛永6年(1629)の3期にわたる工事で豊臣期を上回る規模で再築されます。町の復興と合わせて、ここから大坂は、幕府の政治・軍事の重要な拠点とされていきます。

本史料輯では、この再築工事に関わる徳川幕府や諸大名家の貴重な史料を、初めて集成しました。

取り扱い書店 旭屋書店(大阪本店・天王寺M I O店)、ジュンク堂書店(大阪本店・難波店)、ユーゴー書店(阿倍野店)、四天王寺書林、大阪歴史博物館
(なお、書店では消費税が加算されます。)

通信販売も受けつけています。郵便局そなえつけの、青色の郵便振替用紙でご送金ください。

口座番号 00930-9-82241

加入者名 大阪市史料調査会

備考欄にご購入希望の号数と冊数をご記入ください。そのほか、くわしいことは、お問い合わせください。

大阪市史編纂所で直接販売もしています。

大阪市西区北堀江4-3-2 大阪市立中央図書館3階

(地下鉄千日前線・長堀鶴見緑地線西長堀駅下車)

電話06-6539-3333・FAX06-6539-3330

絵はがきでみる昔の大阪（ 9 ）

大阪控訴院（明治33年～明治42年7月31日）

裁判員制度が来年から始まります。それにちなんで裁判所の建物をご紹介しますと思います。

さて、明治42年（1909）7月31日、大阪の近代史上最も大きな火事が発生しました。「北の大火」と呼ばれていますが、この時の火事は、大坂夏の陣や第二次大戦中の大阪大空襲の被害を除くと、大阪の災害史上最悪の惨事であったと記憶されています。



このときに著名な建物などが灰燼に帰しましたが、ここに紹介しているのは、北区若松町にあった、大阪控訴院・大阪地方裁判所の写真です。非常に美しい建物で、左右対称の両翼を持ち、華やかな中にも威厳のある建物です。

実は、この建物は2代目で、初代

は明治23年に落成していますが、この初代の建物は赤煉瓦3階建てでしたが、明治29年に出火により焼失しています。その4年後に写真の建物が完成したわけです。明治33年（1900）4月21日に新築法衙移庁式というものがおこなわれました。これは、新庁舎が完成したので、仮庁舎等から移転をするという意味です。向かって右側が控訴院、左側が地方裁判所ということになります。口の字型の建物で、中庭がありました。この式典には700人ほどの来賓が招待されました。その中で異彩を放ったと思われるのが、ポルトガル領事のモラエスです。モラエスは来賓の各国領事を代表して祝辞を述べたのですが、前年の明治32年に神戸にできた初のポルトガル領事館の領事として赴任してきていました。その在任中に芸者のおヨネを愛するようになり、大正元年（1912）におヨネが死去すると、翌年領事を辞しました。そして、おヨネの故郷である徳島に移住し、おヨネおよびその姪であるコハルとの交流を綴った小説をポルトガル語で発表しています。日本とポルトガルの交流に尽くしたモラエスが大阪の裁判所新築披露の席に出ていたということになります。（堀田暁生）

大阪市史編纂所では、所の仕事の紹介や、刊行物の案内などのため、ホームページを開いています。アドレスは下記のとおりです。または主だった検索エンジンで、「大阪市史編纂所（おおさかししへんさんしょ）」でおさがしてください。

<http://www.oml.city.osaka.jp/hensansho/>